

学生の日本語の発音を劇的に変える！

ジャスロン代表 笈川幸司

学生はみな、自分の発音を劇的に変えたいと思っているようです。しかし、一度身につけてしまった悪い癖を、簡単になおすことはできません。

しかしながら、意識を一旦高めることができた学生なら、たった一週間で劇的に変わります。一週間ですから、週一授業なら次の機会には、もう変わっているということになりますよね。

では、どうすれば良いのでしょうか。答えは簡単です。口の形をすべて、あいうえおの「い」の口に変えるのです。「あ」と言う時も、「い」と言う時も、「う」と言う時も、「え」と言う時も、「お」と言う時も、すべて「い」の口の形で話すのです。

あの、笈川先生が講演をするとき、口を大きく開けて話していますよね！

それは、わたしが芸能プロダクションでプロの先生について発声練習をした経験があるからです。もし、信じられないと思うなら、周りの日本人に聞いてみてください。これまで発声練習をしたことがあるかどうかを…。

プロのアナウンサーや歌手、声優さん、俳優さんなどは、発声練習をしてきているはずですが。そういう人の話す日本語と、一般人が話す日本語とでは、声の出し方が根本的に違います。腹筋を使ってお腹から声を絞り出すことを常に意識している人が、一般人の中にどれほどいるのでしょうか。

また、すべてを「い」の口の形で話してください！と言ったとしても、「あ段」を「い」の口の形で話すのは少々無理があって、ほんの少しですが唇が開くはずですが。それでも、笑顔で口の形を「い」に変えて話せば、相手に与える印象もよくなり、一石二鳥です。

さて、きれいな発音で日本語を話す人は、アナウンサーや声優さんばかりではありません。電話で営業をしているテレホンアポインターの声も同じくらいきれいです。

テレアポの仕事は「しつこい」などの理由で、多くの人に嫌われているようですが、あなたは気づきましたか？彼女たちの声はとてもきれいで、いつも明るい声だということに。

実は、わたしも芸人として食べていけず、テレアポのアルバイトをしていたことがあります。ここでは、テレアポの仕事をした人なら誰もが知っている素晴らしい方法をご

紹介しましょう。

仕事は電話ですから、相手に自分の表情を見られることはありません。あくびをしていたとしても相手にバレることはないはずです。

ところが、受話器の向こうの相手に好印象を抱かせるためのひとつの秘密道具を、そこでは、誰もが使っていたのです。それは、鏡です。

電話で話をしている間、テレホンアポインターは全員、自分の笑顔を見ながら話しているのです。

無理に引きつった笑顔を見せているときと、心から喜びあふれる笑顔のときでは、声が大きく変わってきます。

最高の笑顔で話をしていると相手に良い印象を与えることができることを説明しなくても、ご理解いただけるかと思います。

では、そのときの口の形を思い出してください。はい、そうです！「い」の口の形なのです。

さて、口をパクパクと大きく開いて日本語を話し続けてもう三年、絶対に自分のおかしな発音はなおらないと落ち込んでいる学生がいたとします。

そういうときには、ガチャガチャになってしまった歯を二年かけて矯正するように、二年とまではいかないまでも、ある程度、無理に矯正しなければなりません。

そのときに使う道具は、割り箸、或いは鉛筆、或いは薄い紙です。衛生面を考えたら、割り箸のほうが良いかもしれません。

口の形を「い」にして、割り箸を噛んだまま、日本語の教科書を朗読するのです。教科書を朗読するときも、鏡を見ながら話す練習をするときも、常に割り箸を噛むと良いでしょう。

割り箸を噛んだまま教科書を朗読する、そして鏡で自分の笑顔を見ながら話す練習をする。では、それだけで発音は劇的に良くなるのでしょうか。

それだけで発音が相当良くなったと喜ぶ人もいますが、自分の発音を良くしようと、スイッチをカチッと入れたかどうかは鍵になります。

最後まで他人のせいにする習慣がある学生がいて、どうしてもその学生だけはスイッチが入らないとします。一番良いのは、そのとき、あなたはその学生に腹を立てず、そっと見守ることです。

それより、簡単にスイッチが入る学生を見つけ、その学生の発音を一気に変えるのです。クラスメイトが次々と変わっていけば、なかなか変わらない学生も、自分を変

えようと努力し出すかもしれません。

では、スイッチを入れるための道具とは何でしょうか。それは、携帯電話の録音機能です。

教科書の朗読でも、覚えた内容をそらんじるときでも、録音機能を使い、自分の声を各自録音させ、それをその場で各自聞いてもらうのです。

わたしが学生にそうさせなくても、最初からそうしている学生がたまにいます。その学生の発音は例外なく、一律きれいです。いえ、発音だけでなく、声まできれいです。

多くの人は、自分の外国語の発音をきれいなものにしたいと考えますし、できることなら、自分の声をきれいに変えたいと考えます。

初めて自分の声を聞いたとき、ほとんどの学生は落ち込みます。「なんてひどい声なんだろう。なんてひどい発音なのだろう」と。そこで、過去に何人かの日本語教師から指摘されてきた問題点を思い出します。指摘されたときは、自分の発音がそれほどひどいとは思わなかったはずです。なぜなら、自分が聞く自分の発音と他人が聞く自分の発音は違うからです。学生たちが、他人の指摘が間違いであると勝手に思い込む根拠はここにあります。

しかし、自分の声を録音機能を使って聞いた瞬間、他人がしてくれた指摘が正しかったこと、同時に自分が間違っていたことに気がきます。これがスイッチです。

ここでほとんどの学生はもう聞きたくないと思い、自分の声を聞くことをやめてしまいます。日本語教師のあなたにとって、ここが正念場です。しかし、それほど難しいことではありません。

あなたはバカな人間を演じながら、どの学生の発音を聞いても、「すごくきれいですね」と言って、毎回授業中に学生たちに自分の声を聞かせるのです。

結局は、発音を矯正できるのは自分しかいないということです！